

「東アジア人文研究討論会派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程三年 姚逸葦

3月18日から23日まで、第七回東アジア人文学研究会に参加して、上海の復旦大学を訪問した。18日の午後、上海に着いたばかり、復旦大学の先生と学生の親切的な接待をいただき、晚餐会で三校の学生たちがすぐに熱烈に討論しはじめた。

二日間の会議においても、古代文字や絵画から現代東アジアの社会問題まで、日本の雅楽から明朝の外交政策まで、古今東西の学問に出会い、幅広い分野の若手研究者と交流してきた。日本研究であっても、海外の研究であっても、古代史であっても、現代の思想であっても、人間社会の現象は共通点が多く存在しているため、時代と地域の差異を超えて互いに交流するのは思ったより容易だった。現代東アジア社会の教育と政策に専攻する私にとっては、普段人文と歴史の研究発表を聞く機会はかなり少なかったため、今回のワークショップはとっても貴重な経験だと思う。とりわけ、明朝と清朝の政府機関の運営システムの実態、植民地時代のマレーシア華人教育政策の転換をめぐって復旦大学と香港城市大学の研究者の優れた発表から、自分の研究に有益な示唆をたくさんいただいた。

杭州巡検の二日間には、紀元前5000年から4000年まで太湖沿岸に繁栄していた「良渚文化」、および浙江省の歴史遺跡を見学し、古代中国南部の文化と美術に驚いた。黄河流域の古代文化はもっとも燦爛なる文化であり、南部は野蛮人の住む所であった、と私はもともとそう思っていた。しかし、「良渚文化」の遺跡を近距離で体感することをきっかけにし、黄河文明に負けない文化があったと始めて知り、人文科学者は決してこうしたような先入観と偏見を捨てるべきだと実感できた。

21日に靈隠寺という歴史が長く、立派なお寺に行き、中国仏教の歴史と現状を実感した。靈隠寺は千年前の宋朝に開山してから、千年以上の歴史を誇り、南中国において規模がもっとも大きいお寺である。見学の時、中国仏教の歴史に専門する復旦大学の学生から、靈隠寺の歴史、建築の特色、日本や台湾の仏教信仰と関係などをたくさん聞かせていただいて、たいへん勉強になった。

最後に、復旦大学の先生方および学生達に感謝を申す。私は今年卒業するため、来年度のワークショップに参加できなくなるかもしれないが、これから三校の団結と交流が進めるようお祈りいたします。